

つまらない仕事

(20170527-20170626)

大村伸一

私の仕事はつまらない文章を書くことであり、この仕事についてから今まで一度も失敗したことはない。同期の者たちのほとんどはおもしろい文章を書く仕事に進み、私ともう一人だけがつまらない文章を書く仕事についた。しばらくするとおもしろい文章がもてはやされるようにはなったが、やがて時代は変わってしまったのだ。今ではつまらない文章でなければ文章ではないという風潮すらある。これが私の仕事である。

おもしろい文章というものは人目につきやすいので、そんな文章を書く者がずいぶん大勢いるかのように思われがちだが、実はそんなにはいない。同期の中で今でも面白い文章を書いている者はわずか一名にすぎない。毎年数は減ってゆくばかりであり、いずれ彼もまたいなくなるだろう。そのとき、世の中から面白い文章というもののまた姿を消してしまうのかと思うと幾分か胸が痛む。しかしながら、これまでに書かれたおもしろい文章がなんらかの形で残されるだろうから、人々はそれを繰り返し楽しむことになるだろう。そんな文章がいつまでもおもしろいのかどうかはまた異なる問題である。

この頃は、何故この仕事を選んだのかと聞かれることも多くなった。そんなときは、将来性があったからだと答えることにしている。おもしろくない文章を書くというのは意外と難しくて、こうして長い間この仕事を続けられたということは多少なりとも才能があったということだろう。今も昔も、大抵の者はまったく文章を書かないか、あるいはおもしろい文章しか書けないかのどちらかなのだから、つまらない文章を書くほんのわずかな才能が自分の人生を豊かなものにするかもしれないと考えたのである。それが正しかったのかどうかは、今となっては分からない。未来に対する希望や予測などというものは、正しいか間違っているかという範疇では捉えがたいものである。

私の仕事がつまらない文章を書くことだったので、最近になるまで私には仕事場もなければ机もなかった。初めて仕事についたときは上司から国道の北側の歩道で腹ばいになって書けばよいだろうと言われたし、その指示に驚いていると屋根のあるところがよければ食堂の床の上で書いても十分につまらないだろうとも言われたものだ。その場合も食堂の冷たい床の上で腹ばいになって書くのだという。内臓を適度に冷やすことが肝要だと上司は教えてくれた。国道で腹這いになって書いていると不審尋問を受けたり理由もなく石を投げられたりした。私と共に、もう一人つまらない文章を書く仕事についた者がいたと前に書いたが、彼は勤務十日目にして、誰かの投げた石の当たりどころが悪くて死んでしまったのだ。十分につまらない文章を書いてはいたが、その人生は誰かがおもしろいと思わなくもないような終わり方をしたということだろうか。だとすれば、これは記憶違いだろう。つまらない文章を書く者の人生がつまらなくなるなどということはありえないからである。

上司のことは従って食堂の床の上で書いた文章というものがどう工夫して書いてみてもつまらなくなるものだということが一週間もしないでわかった。だから、私とその同僚はどうしても国道に出かけて行くことが多くなったのである。その頃は内臓を冷やすことがつまらない文章の肝要だなどという話こそが眉唾だとは少しも考えてみなかった。北側の歩道に向かう途中には公園と大きな湖があり、その光景はいつも寸分も変わらなかった。そのときはじめて、変化のないということがどれほどつまらないものなのかということを初めて理解したのであり、それは我々の上司が新しい部下に教えようとしたことだったのかもしれない。

今から思えば、彼女は若いだけでなく十分に魅力的な女性だった。彼女というのは、私とともにただ一人つまらない文章を書く道を選んだ同僚のことである。仕事について半年ほどの間は、つまらない文章を書くことの困難さに心を奪われていたので、彼女の魅力には少しも気づかなかった。半年経って、私とその同僚とで仕上げた文章が、上司から初めて十分につまらないと認められた日、よろこびの笑顔浮かべる彼女がひどく美しく見えたものだ。「ひどく美しい」というのはただ「美しい」のだろうかそれとも「ひどい」というのだから「醜い」ということなのだろうか、彼女を見ながら私はそう考えていた。実は、今となってはその日の彼女の顔がどのような形だったのかを思い出すこともできない。「美しい」といってもそれだけのものだったのだということだ。「つまらない」を超えるような概念はどこにもありはしない。

おもしろい文章が世の中にもてはやされていた頃、私には初めての子供が生まれた。彼女との間の子供である。生まれた時代のせいなのだろうか、その子供はおもしろい文章ばかりを読み漁り、つまらない文章を仕事にしている両親を軽蔑していたのではないと思う。一度、机の上に置き忘れられていた息子の日記をふと手に取って開いたことがある。読み始めるとそのおもしろさに惹きこまれ夢中になってしまい、彼が部屋に戻ったことに気づかず、読んでいる姿を見咎められてしまった。それ以来、彼は私と口を聞こうとしない。

しかしだとすれば、彼は私よりも年上だったということにならないだろうか。日記を書くという習慣は、おもしろい文章の流行が始まる数日前にはなくなっていたのだから、あれほど長い年月の間日記を書き続けていた彼は私よりもずいぶん年上だったはずだ。ずいぶん勘違いしていたものだ、あれは私の息子などではなく父親だったということだろう。確かに、つまらない文章を書く仕事に進もうかどうしようかと悩んでいた頃、あの父親は幾度もおもしろい文章を書く道を勧めてくれた。父親にしてみれば不肖の息子を持ったものである。あれ以来口を聞かなかったのは、たぶん、つまらない文章を書く道を選んだ私は勘当されていたということだろう。彼が一年前に亡くなったと母親の口から聞いたのはほんの最近のことだ。

一緒につまらない文章の仕事に進んだ同僚が自分の母親だと知ったのはおそらくその頃のはずだ。結婚してから何年もたっていたが、父の死を告げる彼女から初めて、あなたの妻は他ならないあなたの母親だと知らされたのである。つまらない文章を書くという仕事をしている以上、誰かが面白いと思うに違いないそのような人生が私の人生ではありえない。つまらない文章を書く者の人生がつまらなくないなどということはありえないからである。つまらない文章を書く仕事を選んだのは同期の中では私ただ一人であった。同僚などはいなかったし、これまで一度も結婚などしたことはなく、子供はいなかった。

私の仕事はつまらない文章を書くことなので、命じられれば何も書かないこともあった。何も文章が書かれていないとき、それは大抵読むことができないのだが、読めない文章はたいてい面白いとは言えないからなのだと言われた。しかし、そのように読めない文章は面白いと言えないのと同じくらい、つまらないとも言えないものだ。このことに気づいてからは、そんな仕事は引き受けることはなくなった。一文字も書いていない読めない文章の対価を受け取るたびに、自分の才能が削り取られていくような気持ちになったからだ。あるいは本当にそのたびに才能が失われてゆき、今では何一つつまらない文章を書けなくなっているかもしれない。

確かに、長い年月、つまらない文章を書き続けてきたが、それが本当につまらないのかどうか上司以外の誰かに評価を受けたことはない。仕事を始めてから半年で、これは確かにつまらない文章だと太鼓判を押してくれた上司は、それからも大抵提出した文章にはどれもあまりおもしろくないからまったくおもしろくないまで、悪く評価をしたことは一度もなかった。今までこの仕事で一度も失敗したことがないというのは、そういうことだ。あの上司は、最初から何か含むところがあってそのような評価をしたのであり、本当はこれまで一度もつまらなくはなかったのだと言われれば反論することは難しい。例えば、初めの頃であれば、上司が私の若い肉体を狙って、地位を利用してそのような評価をしていたということもありえたのかもしれないが、最初から今まで一度も口説かれたことはないのだから、そういう理由ではないだろう。あるいは私は自分の父親が誰なのかを知らないが、その父親が時の権力者であり、その権力者におもねるために上司が歪んだ評価を続けて来たということならあるかもしれない。あるいは上司は文章を読む教育を受けておらず、私の文章を読んでも理解できなかったので、無難な評価を続けていたのかもしれない。あるいは上司がつまらないと評価していた文章はどれひとつとして私の書いたものではなかったのかもしれない。私と共につまらない文章を書く部署を選択したもう一人の同期がすべてを書いていたというのはいかにもありそうな話だ。いずれにせよ、そのような評価にどんな価値もありはしないだろう。

確かに、おもしろい文章とつまらない文章との境界を明らかにするのは容易なことではない。しばしばおもしろい文章はほとんどつまらない文章であるし、忘れられたつまらない文章は思い出してもおもしろいものだからである。あるいは、まだ書かれていない文章はおもしろく、すでに書かれた文章はたいていつまらないという言い方もできるだろう。あえて客観的な判断の基準を置くとするならば、それは苦情の数だろうか。おもしろい文章には苦情がつきものであり、つまらない文章にはほとんど苦情はない。それはおもしろい文章が人目につきやすいため、多くの不機嫌な者が読んじまうということや、つまらない文章は読んでいるうちに退屈で眠ってしまうから、苦情のハガキも夢の中でしか書けないということなどが要因としてあげられる。とはいえ私の郵便受けには毎日入りきらないほどの苦情が届いている。それは決してわたしの文章がおもしろいからというわけではない。その多くは、意外にもあまりにもつまらなくて最後まで読めなかったことへの非難である。如此く、読んでもいない文章に苦情を送ってくる者たちこそ如何ともしがたい。つまらない文章の読者はやはりつまらない者だということである。

さて、上司の判断があてにならないとすれば、自分で評価するしかないのだろう。しかし、自分の書いたものが十分につまらない文章であるかどうかは、それを書いた自身には判断しがたいものだ。というのも、そもそも自分の書いた文章は自分では読むことができないからである。多くの者は文章を書いてはすぐにその文章を読み返し、読み返しては書き直すものと信じ込んでいる。それは大きな間違いだ。それはただ読んでいると思い込んでいるのにすぎないからである。そもそも自分の書いた文章は書いたとたんに関わりのものに変わってしまう。言葉ですらないものになる場合もある。文字ですらないこともある。文でないものや文字でないものをいったいどうやって読むというのだろうか。だから自分の書いた文章を読むことはできない。世間では、自分の書いた文章を読むほどつまらないことはないと言われることもあるけれど、本当のところそれはつまらないこともなければつまらないことでもない。ただ読めないことに気づいていないだけだ。

もしかすれば、私と同じくつまらない文章を書く道を選んだ同僚のあれであれば、私の文章を正しく評価できていたかもしれないと思う。だがその同期である彼だったか彼女だったかは私とまったく同じ文章を書き、まったく同じ句読点を打つ。二人の書いた文章はまったく同じなのであり、経緯を知らない誰かがもしも二人のどちらかが書いたものを見せられても、それだけではどちらが書いたのかとうてい分からなかっただろう。仕事を始めて半年後、上司がつまらないと断定した文章は、二人で一緒に書いたわけではなく、二人の書いた文章がたまたま同じだったというだけのことだ。上司はふたりがそれぞれ同じ文章を書いたなどとは想像しなかっただろう。私たち自身でさえ、どちらかがどちらかの文章を書き写したような記憶がある。どちらがどちらの文章を書き写したのかは、どれだけ考えても思い出せないのだから、そのような記憶は間違いなのだろう。だとすれば、それぞれが個別にあの文章を書いたと考えるしかあるまい。誰であれ国道の北側の歩道で腹ばいになって文章を書けば、まったく同じ文章を書くことになるということなのだろう。だとすればそれが同じに見えたとしてもそれは結局は別の文章である。だとすれば、そんな彼だったか彼女だったかに、私の文章を評価することなどできるだろうか。まったく同じ文章とまったく同じ句読点しか書かない者に私の文章を読むことができるわけがない。

そういえば、おもしろい文章とつまらない文章とを区別するようになったのはごく最近のことである。昨日ということはないが、半年以上前ではないだろう。それまではただ文章というものがあるだけだった。ただの文章を書く仕事があるだけだった。それでは、何十年前にも、おもしろい文章を書く仕事とつまらない文章を書く仕事を選ばされたのは何故だったのだろうか。我々の上司には先見の明があったということだろうか。だが、おもしろい文章を書く仕事を選んだ彼らに正しい道を示さなかったのはなぜだろう。先見の明などありはしないのだ。何十年前につまらない文章の価値を見出していた者がいたわけではないのである。

それにしても、それからしばらくして面白い文章がもてはやされていたあの頃、いったい何がおもしろいと言われていたのだろうか。あのようにおもしろいと呼ばれていた文章も、今つまらない文章と呼ばれている文章となにも変わらないつまらない文章だったのではないかとさえ思う。あのころ書かれた文章は今でいう文章ではなかったという可能性もなくはない。今目の前にあれらの文章が置かれたとしても誰もそれを文章だとは気づかないようなものだったような気がする。たとえば、私であったか私の同僚であったかが協力してだったか個別にだったか書いた、初めて上司につまらないと認められた文章を私は思い出せない。おそらく私の同僚であった何者か思い出せないのに決まっている。そんなものははじめからなかったということだろうか。あるいはそんな上司がいなかったのかもしれない。

たとえ上司がいなかったとしても、そのはじめてつまらないと評価されたその文章が、他でもない今ここに書いてきたこの文章だと言われればそうなのかなと思わないではない。そうではない理由などないからだ。たぶんそうなのだろうと思う。なぜなら、これを読んできた者はおそらくこの文章を読むずっと前に眠ってしまっているからだ。だれもこの文を読むことなどないだろう。だとすれば、これがあの文章ではないなどと誰も言わない。